

天正記

六

禁中へたのししなりせの志としてあきらみ
おとしくもすふおのめさるる趣きなり
うけうもみお人のゆいあんとるるをまらあ
おらうてあう地ふいほうをそなへあうすう
まゝと乃んりしそをあうめとのゆいあふ
て万産ししれいそよほし侍りぬ吾むとせ
りそくせのふをあくもふと

数白

元結

一今夜しゆらくていり付て
おが世つあられく乃趣殊りしもつてあり
らん海をまよかす
一まんまのやうな比子い下舞ふ流流
乃知

おホもー無乃のやううあまのりあとの
ていけんぬくへあふれ代不及中一子
そんい幾なふやうよP垂て
一圓白ぬほおそれぬもじふなるんい
魚りさるる

右此際しもー一うりといふもい
めし知んらん多のちやく回大天王
六十餘列乃大お乃神祇しと
おーてま日大助八幡大ほ
らんうー乃らんふ海い
らんうくらんう
らん各まうり
の死さやうの件
天正十六年四月十日

大と湯控が相を長たりり

ふん義九郎兼中ノ秀家

あん中ノ納言とよと秀次

あん大納言とよ信じて

金子との

内大臣平信雅

内大臣源家康

同町初とれびり一とれり又と日前

志佐侍従と入りくら

くられく侍従也と長

京あくの侍従と長

井侍従友原り成と

倉山侍従とと

伊勢侍従定ま

吾後侍従とと

うぬ侍従とと

ふふ侍従とと

源又侍従とと

さつ侍従とと

越中侍従と勝

河内乃志く秀と

つとりのとく

三侍従平信雅

丹後侍従とと

松ウレと志くう成つ

水際志松秀まさ

東こう志しうひくろ

三のれ志しうひてや

たんしのが将ひてう

儀侍後平信のぬ

目付あて不同

扱今日を扱方此の會とゆふめられはききゆらう
まうのめひひこしく日まやう一人結ふゆらんも
ゆらしくとてなふとなくうちけくまのほをさ
ひらとひりぬ下もゆつれうとまませさし
のふとてさるれめくけうさうえのわりぬひぬ

うんくのめひこまを止物

四の平 則志筆

手字ふ 治志三少く一けい らんめう百さん

ふちやくめうりれたのふくれ井のやととて

あみそり六人しそりふて糸状 ほかせのけを

けめや一法門たせいとん以下とくを引て

おくれわり

一糸ぬ 二糸ぬ

少一尺ぬ 九糸ぬ

一糸ぬ 二糸ぬ

遊漆ぬ 菊亭ぬ

漢大ち前肉大尺

あのをちゆへ 西色二妙くろくくいのし一まい

おん一こ 修いめう 佛小禮一うさの太刀一う

地まやう 西お望うと太り 物や一香くまんき

のひうりまは紙少のすくるまを治志ゆえんひり

天下しく世々ひてのりりよく清りもくけりき
まりてみかえひ版はくしや三日先十六日のあけ
海北より夫れうましくもちあふりやひしんやしよ
らうらや一川二行こかまむらちめやうらりあり
りしうひりことつたう玉水れをとまぬふ乃きん
りくれやまをこまむらちめやうらりあり
なりやふれり、此清舎りしつひあむまゆしやう
清らまひしとぬれ伝ふ

- 一 藪すつりれ内大長 二 大和太納言
- 三 高尾りさ大納言 四 久我大納言
- 五 日りく大納言 六 うちう丸大納言
- 七 中ノ山太納言 八 石原りれ清門

- 九 勸修寺殿 十 さい抄んるとの
- 十一 田川けしし 十二 阿そり井汲
- 十三 尾張内大長 十四 徳大しとの
- 十五 菊亭太長 十六 せき左大長
- 十七 町い汲 十八 妙法院乃まや
- 十九 二条お園白敷 廿 志やうきん院
- 廿一 一てうしのこう坊二 九てう志のあう
- 廿二 志やうきん院 廿三 仁教る乃まや
- 廿四 阿そり足との 廿五 びろ町入る
- 廿六 六れまや 廿七 園白敷
- 廿八 志のしやうの清くんいしそりく初るし是あり
- 廿九 中ノ納言きん義い下りくんりしあつめおお

つきひてさうしん納札多くの人うす乃葉びりまり
 びくふ最納産しんくもり乃うきひをう次費の
 りりきさるま正十三年七月十三日しんじうし
 あり南産するつかりしれを治差られがけり
 流日ふのふきふあ日代所舎也は志やうしんの時
 登りふんの中細言三位中しやう花山乃階後
 前のさいしやうせれさつりうしりひさのふす
 の月六日尾ひり大納言大和太納言は七人の
 りりせいのをハくろ細言ひの勅さひふよめて物
 志やうしんまりむえがさう納かくもん志の中
 山うしすまねひれく大納言ふしりしんははれ
 けすりふ登丸あんのよういけりさりともあま

なるきりれかんも七めんよそを納りしんく
 乃治進むのりり
 一 さんなん女善 一 志やのり乃包う二十さん
 一 志水神百 一 まうらん乃りんさん同白しひれ
 左のりりをゆる 一 治る十ひま
 右のりり 一 やうてひひりりまねなり

まめ

りんしや
 くるし
 のりし
 まらさ
 せい
 とせし
 丸山大納言
 菊亭のあり
 中ノ山とうり中ノ将
 のまか井前大納言
 園白く

うし

おのれ人教

おのれつれつ

ひのく新大れあん

慈助のん中一細き

伯乃さんい

それくか将

急い加巻とらるこゆ

勸修寺大納言

三河一の前大納言

久我の大納言

ひろは乃中一納言

あすらのの中一納言

又川一乃厄言

和歌

まれてちよまらうひのれや巻うえの

てせくらく突とつけて見せはく

友目 初巻しゆらく急い日急い言

松といまひわの

岡白巻長秀言

弟代乃まきうそゆふりうたれあん

ことり本たりま乃されさき水

急い言松とらんこよ

ちまりのれや巻まらぬくさくは川風

子代とびくせれ巻れ松うえ六ま右佐凡

おきまらん時くくまらつ風乃

こすあよまらう万せいれ急い見取

かこ風もあふまのまらてまらつたうふ

やほと流れぬの回方ううく 凡余ぬ

お生の松乃見とらるもあふまらう

いくらよふてたいろは見とらん 一乗ぬ
悉もらんもふもきておとむてう
世のいゝ志取すまきのまらぬ 幽深ぬ
わふはすれ外まてなつく國のつを
まのふうのしして空海よけしし 菊亭ぬ
うのみこり子代よやちよのまそへて
うふまらきとらるるそ乃玉松 越大らぬ
飛のこ人の山なりなりなまをひ海と
池のし海てめまつのの本高ま 尾張信雅
ま見も人ときふとまら侍ていふなり
こ母てか邊を松代うの海よあとのぬぬ
やくまらばきとかよもひもあぐれるの

つもとのまつれ子世れゆ末 田つーぬ
りきりなふれとあやちよやこも取らん
まらふ海れまつの見らとふ 西抄んちぬ
せしを海んきとめくえのふうふと
松乃みこらういよけりて見すらき 勧修らぬ
あまゆれ志とへりきふとまらうやと
こくへおきりぬ万世いの夢 大のれ御門
うふまらきとらるるそ乃玉松 中ノ山ぬ
うこれなふよこのためしを引うら
つし抄の巻の通しししりー うう守茂ぬ
天地もうこそなふよお生まれ

雲心とまづ雲心まづうらたん 日聖てふ女
天比れゆくかもうつてまことの代れ
ときこの笑と松たみすらん 久契大納言
うららともしえこのまづのつりうらも
ふそとんえり子代れゆき
みとらたつこの紫いふはまんれ
子夏の敷紙ちりりてそみる すすりの
用大原源家康
ついであふ御書とまづの友がこの
ゆりうらまゝいふ苑のいりぞ 大和秀長
ゆりうらまゝいふ苑のいりぞ 大和秀長
子夏の敷紙ちりりてそみる すすりの
用大原源家康

うらうらとまづ雲心まづうらたん 日聖てふ女
天比れゆくかもうつてまことの代れ
ときこの笑と松たみすらん 久契大納言
うららともしえこのまづのつりうらも
ふそとんえり子代れゆき
みとらたつこの紫いふはまんれ
子夏の敷紙ちりりてそみる すすりの
用大原源家康
ついであふ御書とまづの友がこの
ゆりうらまゝいふ苑のいりぞ 大和秀長
ゆりうらまゝいふ苑のいりぞ 大和秀長
子夏の敷紙ちりりてそみる すすりの
用大原源家康

うふやむさねみりよもひふひくれなり
とささしれ松もくねえひるへし 花山院
町るしわひてさりふれさゆ乃ちとせ張を
きんのをめふと繋ご加かう

三束お母死町の

ゆるひ珠の袂れまよりりりもやのまろ
とささしりきんくの末末やかり 赤田丸
きんごささしんこつりをなうるくと相生り
いく子代色んや森のまろうえ 白河殿
死ともなげありのせみすらんりこまひる
つとみ孫乃まろさよをよる月して 高倉
松う忍乃志まき望あひくらよを乃おまよ

つとみ孫もよる川をやアし 吾長秀丸
いく子代もくねえなりつてアユのり乃
通と見えアふらきさア垂りれ 万葉小徳
ちよとあんれこのよもひ珠松りや
とふぢこのりさこーなりらん 中山殿
君かばめうアしとささしりお見こ松
本乃りえりけや孫もさそまろ 西の洞院
きんのを色んよもひわささし 徳とれすむ
松も孫もーの弟サのり 田代しし殿
天下免くみあまねを本へるりり
松ハちとせのかけ紙とまわり 又桑との
きんごのよるけさまわるり乃地りゆれ

山とやけしん書のまづうえわじり井
つりたりきみきりのまづよらうひ
きこか子年のまねや魚ん
すもくはふらまごころはつりほくも
おしおふ御代乃まのへりりり
子年おんまづまねふり海乃
くらのあつるはめ志はしりも
志り代乃りまを志しり今まの
子まの松乃とれしうふもよ
分代乃たねとんりまうきても
おころの志りうらん やくりん
お生のまらよらまりていく子代も

た君のよもひるけさ志を思ふの
三糸酒ぬ
れのしひとつじり花れこと乃もの
へりりよまや松小のゆかん
うへおましりまもりこま
子年しりらぬまと思つし
まふらもなといろそへてま
つまきぬれりし志子らま
うのしりまをまらうくられ
のま万代とてて
わのまらりとせとをて
まゆよさうふるりも
りまらみまもれ
勸修寺

枝とびらさぬせりもさうれ
 うさしなりまら小なりひてふさうるん
 ちよれゆとせやきふぶらん
 つひよあふそりれよのさい海うよや
 れこの千邊のうさうあまを田ぬ
 のふきてうふんからとせをこしれ終り
 ちうへうへうさうまをれ松風柳けこの
 きこの代をうまりもあまのうさふ
 うつよ小松口うてもうふらん ひろ橋ぬ
 いろり魚ぬまつ頭たのうわのえんの
 ちよよおやお代とらされゆと急 ぬがえ町
 ささからぬうへとくもをれ雲うおそ

いくお代にれぬりーなるらん 下冷泉
 いろり魚ぬまつ頭たのうわのえんの
 けくえんたうーさるま紫花みら まいぢんぬ
 うこれがふつと成おれゆ松のふや
 若びしし海のいろとらふらん 香田との
 うさりおもおうへとくまつ乃ぬみとり
 若のうつく見うりらよもおぬし 田家ぬ
 久のこのお井入りよをれ雲風も
 枝とびらさぬせりもさうれ
 今回ようのり手年一色ぬ人おゆくすゑと
 きこよ繋らんよち乃松系えとんの小海
 うさしなるのんひとをれ終り

ふんを足きり乃松より死らせし くらんじ
天正十六年四月十六日 和しん清會
夏日るふ けきまぬらく大い同祿

松と交和書

う愈とりらみくらり乃松よりまきまらしてし

子代ハゆきとてして志くはく 加賀利流

みらししうら時も今もくお生の

志の子年といくよりさねん 津北信澄

そくー一まや回方よりさりふ松松のこの

うくぬゆりけとれじ松人 丹波ぬ

くさくと足りくさきり乃松無いくちとせ

志りさりのむんたつーなららき 三河秀康

死足のたぬうへ垂よまのまののもの

つも死をりよ乃松よまのん 左巻の義康

よしとてしうらます志よ志くやも

帯みくく死よまの山松 とうあうの信澄

志とのねな紙のくもまんさうかき乃

子代乃みともや今志けくらん 水老秀政

のふくせのん人のうの死とて

や子年れけく松乃よのりも 松の信之

ふんり世れなうさたのーあまつよすむ

鷄の子年浅う愈てりくむん 丹波元均信

死足の代スーう愈てゆくさひらさくらまら
みきり乃志乃きふれ子年明 死り

らちとろくさゆしとれものつひなり
まればあふふうまもろふらめ
きこといふたやううしり
松も久しふらふのせく末
うそへみん千匹とらまはせや
雲よ小松のうけとけりて
あさううぬこらもあさう
く小乃部よりお生乃松
とるてもうもろぬまの松の
らまりりりともあつ来た
さかかよれぬうあ絶え
あけりぬえよたかくへて
ふゆ侍従

うけさうまきうおひうれてま
久しうばつたあ念ふも
うけたりあさうはらゆる
子年へぬつた九重れうら
九重れまらのねさうの
さうま國通とささう
うらそさる千代のみと
雲乃よしひとあへぬ
万重もれまのそきりれ
あさうあさうあさうあ
ゆさうなるあれうら
れまのあさうあさうあ
出佐侍従

天正十六年四月十六日 ありん源會
落中一急の方 松を焚てし

しやうらんしゆこう ち方う海 ちや門るまう

ち小ねまきさされかほくならふせと

つけてそちれるやとのまつの事

年とてんまきかよもひとろふをり紙

色小見せうろ海代松のこ ちやうまん院

しやうしうゆらまそいしうさこ佐のふと

同し手取れお生乃まら ちやうあんのん

切さままき紙せうしりひふあふ松のきり

実しを志取ふれんり子年と ちや門修理

たさ海まき紙よ冬久びくれそらみかく

同らん松の技をりうさね ちやいねん

天正十六年四月十六日 ありん源會

ひびうまんとて

ちのしやうしゆのさよなされ物ことものしくゆらん

ちありらうしく結志ゆらん取年しりしこつはま

ちの川とそ

ちやいねん

一 敷らんせいらく 二 敷らんえらく

三 敷らんえらく 四 敷らんえらく

五 敷らんえらく 六 敷らんえらく

七 敷らんえらく 八 敷らんえらく

九 敷らんえらく 十 敷らんえらく

くく筆まやうを望ほしし大納言類乃のびくやよ
ふるのまくこやくりくくやく前よたひこ
のりうつこふいひたりふてうし浅とらてさう
らんせいとあふしこまよと何めてよりあせい
うくううりきあううくもあつたれまんまや
ふしきのけうまあうたれまんらのうらうの
まうふとあうしあひやとくわひ下ひまひや
まのうらうをまししあうとくさゆくまうさう
まうりあもて舞よもとのけいあえあまのたき
うしこれきらよくとのやうひこ色上りこをらん
ひのうそあふあさめたひさんしと ぬ産
わうためられてゆりけうけまうる七あんまきと

水の故お大まんとうらうとまんうのしう清俊と
して色上柳あり

- 一 水小神二十しき 一 とう金五百あしやまん
- 一 柳くろしき 一 けうり一こ 一 せん
- 一 柳くろしき 一 せん
- 一 水小神十しき 一 せん
- 一 柳くろしき 一 せん
- 一 水小神十しき 一 せん
- 一 柳くろしき 一 せん
- 一 水小神十しき 一 せん
- 一 柳くろしき 一 せん

右大改系あうり色上なり
さそあんしうあうり色上なり

よき徳なんちやくと成くりあつては
万代よむ子代とくそこの世に終てを

一 万代よむ子代とくそこの世に終てを

天下よりいひよる人々をすやうあはれんし
しと乃この瀆のまきこころしけく我とも

うふか聖あつては悉ありよもいひハ

志のしやうとほしめをり各侍さうさあり又日十
八日くそんまきよなり 天下よりいひよる人々

志のしやうとほしめをり各侍さうさあり又日十
八日くそんまきよなり 天下よりいひよる人々
のあくはかりよはうまんとよせまきあう乃らん
こころをいひくおをつ流する上のふつり

つらさるる世にむきつらうくそんこころをいひくおをつ流する上のふつり
わうのいひえさうしとむひの三十巻こころをいひくおをつ流する上のふつり
りくろぬこのころはまきよとむひの三十巻こころをいひくおをつ流する上のふつり
あつては悉ありよもいひハ
志のしやうとほしめをり各侍さうさあり又日十
八日くそんまきよなり 天下よりいひよる人々
のあくはかりよはうまんとよせまきあう乃らん
こころをいひくおをつ流する上のふつり

少りて坊曰まてやふん初まいせんも少り修くま
て目よちの事りんしし修ひ一ふめこうとくえ
きよとの町しまつ日バけりも少やかきりしと
夫のふきふ乃ぬこて天をようかひのひしし
お母え侍里れと各中一ありあり 天下くく
清らあこひり

三三の伝言

これとめて玉れひりるのあもねく
みゆふる々乃徳人の裡
天までも君のみゆき取けりて思ひ
あめ少りせこびよをれおもつれ
みゆを想ひししる乃のあきりわれも

う魚れさびれくも乃う魚人

けりゆれ一志ゆそ さまうのうれ修くかひく
まやう志ゆつてたさるうまこしとせりあうそ
あかしくやせん中の一志ゆそあ絶つそと
とさそ志ゆき流ありのひりとりひりてゆふ
まやぬ一ゆも大をらうわうていりみゆふ
きくそんもんとしたまふむひやんぬる流
則ちんさくろつあつあられせんまなひり院
此修志よへとより進上志流ふるり流う魚状き
今寝ひ孝くけりなふ次すお糸内ちめ中一上
包くゆとつたえりし乃たあうそあゆの三
志ゆあれとちん上ゆと流くゆひろうりあゆ

うるるくは せんとうへも清目るうりりられ
ちうふつが老せん一れきれいより

藤云 四月廿四 西判

菊亭奴

勸修寺奴

中山奴

物急のあしうそなへら我 西きよし

あさうしうすしとあしーあり

玉れとくみくろりけきとせおひろく

あふくひろことうのせあこく

うふらうしふとわらふとむわれや

しきてつうなるらもれうへん

あうさうしひまとじらやとりゆん

ははつるおれまのむまゆくれ

うのもれーからもたきき振りまひて

たまのひらうりよまをとりかふ

右人のむつ、おまよのし急らんせい力いああり

中右んゆせい舞又天下清之ひうホアし風乃てい

浅さうひぶりのおもひき、は清行ふ治よ乃あう

わうゆらんやらんららへ取上人みかべらしくは

たうひて清色するあり廿一日まを橋家門迄清苑

ホ香らひせいへ清礼を志ん物蛇とたしくあり則

清苑面うそり色させゆひぬほさひのめきれい

あしひ、事ううーるれたうーまも空付らひさゆ

まゝし万代にまゝしんをしつゝまて思とくとかう
ひつとまゝさるひとらうく故一ゆきをみゆふすこ
りく致よや國おのんせんのみつりるり是よまゝ
るうらすあるふるり日さおま大徳んむけくをを
くく井と尋りけり午をふけい母を命もふるり
う致とむん千秋万歳の世をひ致のの理りた
ふふ魚うらるるの也

天正十六年一月廿一日

天正十六年一月廿一日

天正記巻第六終

天正十六年一月廿一日
天正記巻第六終

110X
323
9